（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　野町 素己

本論文は、スラヴ諸語における所有文（所有を表す文）の様々なありかたを比較検討し、所有文から派生する文法構造を類型論的に分析したものである。

論文は全 5 章から成る。

第 1 章では、スラヴ諸語に限定せずに、人間にとって普遍的な所有性の概念を言語で表現する場合の様々な側面を概観し、特に Heine の先行研究を参照しながら、所有性のプロトタイプについて考察している。

第 2 章は、スラヴ諸語における所有を表す表現の構造を比較対照しながら概観している。主としてロシア語（東スラヴ）、ポーランド語（西スラヴ）、セルビア語（南スラヴ）の 3 言語を対象として、それぞれの言語における所有句や所有文を取り上げ、それらの構造的な特徴を明らかにした。

第 1 章と第 2 章が概観的な性格のものであったのに対して、第 3 章以降が個別の事例の調査・分析に基づく本論文の核心部分になる。まず第 3 章では、スラヴ諸語における所有文の構造が類型パターンの観点から分析されているが、特に注目されるのは、スロヴェニア語における「半所有文」の緻密な分析の結果、通常南スラヴ諸語に分類されるスロヴェニア語が、この表現においてはじつは西スラヴ諸語に近いパターンを示していることが明らかにされた点である。

第 4 章では、スラヴ諸語における所有完了（possessive perfect）について、Heine と Kuteva による「動的類型論」の枠組みを援用しながら対照分析を行なっている。特にポーランド語とカシュブ語の比較を通じて、それぞれの言語における所有完了の文法化の度合いの違いや、ドイツ語の影響の強弱が論じられ、互いに近いこれらの言語の際立って異なった面がくっきり浮き彫りにされた。

第 5 章では、所有関係の動的な局面（所有の移動を表す表現）に着目しながら、「受容者受動構文」に焦点を当てている。この章で特筆すべき創見は、これまで先行研究のなかったカシュブ語における受容者受動構文を詳細に分析したうえで、その文法化の度合いの高さを明らかにするとともに、所有完了との内的な影響関係の可能性があることを指摘した点である。

本論文では、所有性という分野に限ってではあるが、東・西・南の主要なスラヴ諸語がすべて考慮に入れられている。そのように極めて広い視野のおかげで、類型論的に興味深い観察や発見が可能になった。他方、カシュブ語のような本格的先行研究の少ない言語の分析に重点を置くことにより、個別言語の事例研究としても貴重な業績になっている。研究調査は普遍的な理論の枠組みを踏まえ、幅広くデータを採集しながら、個別のケースを緻密に分析していくという形で行なわれており、理論と実践調査のバランスも優れている。視野が並外れて広いだけに、やや大雑把に片付けられている論点も散見されるが、全体としてみると、スラヴ言語学の国際学界でも高い評価を受ける優れた研究業績と評価できる。よって、委員会は本論文が博士（文学）の学位の授与に相応しいとの結論に達した。